

左川ちかを探して(1) 左川ちか「硝子の道」と藤村青一「淡水と気温」

(島田 龍)

硝子の道

左川ちか

飾窓が廻轉してゐる。花束は外套のうへにある。リングは屋根から屋根へところがってゐる。自動車はドアの前で止る。そこを通るものはすべて街路から一呎位空中を浮いてゐる。さうだ、婦人等はぶら下つてゐる。常に見えない紐によつて釣り上げらば、またはお互に引き合つてゐるのだ。

廣告塔から夜がとび降る。灯がくだけて青と赤のガラスの破片となつて散つてゐる。切断されながら、歪られながら混雑した街の傾斜面の一部はかはるがはるぐ現はれて走り去る。夜の鳥はその羽毛を一枚づゝまきちらしてゐるのであらうか？ 空気を羽搏きつゝ、軟い羽毛が一時に飛翔するために全部のあかりを覆つてしまふのでぼんやりとしたランプが街路を充す。

フルウツパアラアは果實から發散する甘い濕氣で煙の中に沈んでゐるやうに形がはつきりわからない。おゝ!! 私でない私。扉に近よるのをつきのけて出て來る私。黒い手袋。プロオチの紫水晶。すつかり私を真似た幾人かゝ樹木のやうに映つては揺れる。揺れる。どれがほんとうの私なのかわからなくなるまで。幻の鏡。不思議な道。一本の指先が硝子窓に觸れた時、その向ふ側のメロンはたやすく突き刺すことが出来る。

※

淡水と気温 — 左川ちか女に—

藤村青一

ぼくの顔は冷たいかしら。道理、顔には小川がさらさら流れてゐる。

あの水脈みの青さに浮沈する枯葉の……。

魚のやうに後退するぼく。ぼくの鱗は悲しく顫へて。

ぼくの枯葉のあのぼくは放浪の身、河底に全く沈む身。沈むだぼくを拾ひろつておくれ。

あのそれは水母くらげのきみ。

きみは検温器のきみ、ぼくの身體に折れてくる。

きみの指は水銀のきみの指、ぼくの紋理へ押ししてくる。

きみは滴りおちる、きみは雫。雫のきみはぼくの方へ歩んでくるよ。

きみは硝子の聖母まどんなのきみよ。きみは絹糸を吐いて生きてゐる。

それは哀愁の透明に罩みなはる水泡となつて。

いや、いや、きみは固く小さい眞珠貝のなかの眞珠。さうよ、屹度。

雲また雲がきみをかくし、雲また雲がぼくをかくし。雲また雲がきみをすばめ雲また雲

がぼくをすぼめーると、きみは身を整理へる小鳥のやうに。

雲また雲がぼくを便乗する。と、きみは雲また雲に投影する。と、きみの方へ。

さうして僕も飛翔ぶのよ、

浮氣者の蒲公英であるのよ、

沈潜する白日の夢であるのよ、

微かに點る浮燈蕊

胸の揺曳ぐ影の邊りの小匣の内の童話の内の王子の寢床を走る水色の油虫だよ。

忍びよる宮殿の窓帷に懸垂する蛭のきみは王女よ。

けれども、ええ知つてゐますとも。ぼくは……。

きみは閉るきみの部屋のなかの化粧室での嚴しい身構へを。

きみを捕へたぼくのあはれ。ぼくの掌に手應へした『哀しき玩具』とは何？拳銃。

ぼくの鏡張りの胸板を目懸けてゐるきみの現身

ドン!!ぼくは鏡の罅で絞る光榮であるのです。水の濡れる音がして、きみの後姿に陥ちこむものは誰れ。

金の勳章。

銀の勳章。

―ぼくは執方を擇ばねばならないの。

ぼくのきみはぼくの胸を、ものの見事に射つてゐる。

ぼくの通風。空虚に敷かれた星座が光つてゐる。

ちか、ちか、光る鱗片の牽制。あのぼくの胸から上つてゆく水泡の墓標はただ、それ。

銀のお月様ひとつ。

※

左川ちか「硝子の道」は、一九三二年五月一日発行の『関西文藝』第八卷第五号に発表。初出以後、長く埋もれ存在さえ知られていなかった。今回、八六年ぶりに日の目を見る。「釣り上げらば」など誤植と思われる箇所もそのまま表記している。

藤村青一「淡水と気温―左川ちか女に―」は、一九三二年七月一五日発行の『仮説』第

二輯に発表。第一詩集『保羅』(近代の苑社、一九三二年九月)に収録。本文は『保羅』版に拠った。

※

一九三〇年八月、詩壇にデビューした左川ちかは、三二年夏には翻訳を中断。創作詩に集中する。同年五月一日、アルクイユのクラブ発行の『マダム・ブランシュ』第一冊巻頭に「白と黒」を発表。同誌は彼女の詩才を早くに見出した北園克衛による。ちかの存在は『マダム・ブランシュ』の中心的位置を占めていた。

「白と黒」と同月発表の「硝子の道」は、そのような充実した詩作の時期を迎える端緒ともいえる作品の一つだ。モダンな都市の風物を彩る言葉と言葉のイメージが連鎖し、前衛絵画のように構成されている。最後の一行に至るまで、その表現は彼女らしく、読み手の想像を膨らませる詩だ。

『関西文藝』は、畑山茂、和田隆、草西正夫、小谷二十三らが、一九二五年三月に創刊した月刊文芸誌である。現在確認されているのは、当該八巻五号まで。編輯兼発行人は当初は畑山義茂(畑山茂)。当該号では山中富美郎。発行所は大阪市の関西文藝協会。大阪市の堂ビル(堂島ビル)内の中山文化研究所で毎月例会を開いていた。同会の機関誌となる本誌には、会員に限定せず、小説・戯曲・詩・短歌・俳句・翻訳・短評などを広く掲載。三〇年五月に畑山らは、関西新興文藝協会を発展的に結成している。

著名な執筆者としては、薄田泣菫、小出檜重、豊島与志雄、江口章子、百田宗治、木下柰太郎、馬場胡蝶、新村出、直木三十五、滝川幸辰、正岡容、林房雄、倉田啓明、生田花世、内藤辰雄、北川冬彦、井東憲、舟橋聖一、堀辰雄、北園克衛らの名が見える。時評・座談会などで関西文壇の広範な営為を記録する一方で、執筆陣の顔ぶれからもバラエティ豊かな雑誌の傾向が窺われる。『関西文藝』の研究の進展が今後期待される。

当該号に休刊の文言はない。ただ編集後記は、「本號から異色ある方向へ動いてゐることが見出されるであらう。元氣一杯の編輯部は色々の光彩ある計画を孕んで出版してゐるので。御声援を乞ふ。」と結ばれている。

詩特集では、前号に「済」を寄せた藤村青一の「温室の保護法案」を掲載。当該号に詩を掲載したのは、ちかを入れて十数人であるが、そのほとんどが藤村青一と関わりある人物だ。具体的には、藤村が同時期に編輯・発行に携わっていた『詩使徒』(一九三二年、詩使徒社)や『仮説』(三二年、仮説発行所、編集人本多宅盛・発行人木谷哲莉)、『Paper』(三三年、へえへえ発行所)、に作品を寄せていたメンバーである。瀬古貞治、勢山索太郎、妻絹子、広川仁四郎、浜田晴美、黒島黒、本多宅盛、木谷哲莉、河東茂生など、関西在住と思われるモダニズム、シュルレアリスム系の詩人だ。『関西文藝』での大量掲載は、藤村の手引きによるものとみて間違いない。それだけに本誌の「異色ある方向」が途絶したことが惜しまれる。

※

藤村青一は一九〇八年に大阪で生まれ(左川ちかの三歳年上)、三一年に関西学院大学を卒業(竹中郁の三年後輩)は、三三年に詩集『保羅』(近代の苑社)を刊行する。当時活発に活動していた関西モダニズム詩人の一人である。ちかとは、東京中野の百田家で知り合ったらしく(小野夕馥氏宛の藤村書簡による)、「硝子の道」から二か月後の三二年七月に『仮説』に発表した詩「淡水と気温」を「左川ちか女に」捧げている。

三六年一月のちかの死直後、村野四郎「碑銘―左川ちか子氏のために―」(『書窓』二巻

六号、三六年四月、『海盤車』五卷二一号で改作、三六年六月、打和長江「黒縁の写真」(『北陸毎日新聞』三六年四月八日)などの追悼詩が詠まれている。

存命中の彼女をモデルにしたと思われる詩は、伊藤整が「林檎園の六月」(『雪明りの路』椎の木社、二六年)、「言葉」「雲雀」(ともに第二次『椎の木』二卷六号、二九年五月)など数篇を残している。ただ、それはあくまでモデルであつて、ちかを謳い詩篇を捧げたものではない(拙稿「詩人の誕生―初期伊藤整文学と川崎昇・左川ちか兄妹」、『立命館大学人文科学研究所紀要』一一八号、二〇一九年一月予定)。生前のちかへ「硝子の聖母のきみよ」と呼びかけ、「ちか、ちか、光る鱗片の牽制。あのぼくの胸から上つてゆく水泡の墓標はただ、それ。」と、特別な思いを謳った詩は、藤村青一の詩篇が唯一である。

詩人左川ちかは、同郷の伊藤整の緻密な戦略によつて主知的モダニズム詩人として鮮烈にデビューした。父のいなかったちかを娘のように面倒をみた百田宗治と、文学上のパートナーとなる北園克衛との出会いで大きく飛躍する。そして崇拜者に藤村青一がいたことは彼女にとつて幸いしたかもしれない。

藤村は北園克衛と交友関係にあり、一九三二年には第三次『椎の木』に同人として参加。三四年には『レスプリ・ヌウボオ』(ボン書店)に参加するなど、彼女との文学上の接点も少なくない。左川ちかと『関西文藝』との直接的な繋がりは不明であるが、前号に執筆している北園克衛か藤村青一、とりわけ藤村に紹介された可能性が高いとみてよいだろう。

※

『マダム・ブランシュ』を始めとするモダニズム詩誌の最前線にいた左川ちかであったが、次第に地方発行の詩誌やモダニズム詩に限定されない文芸雑誌にも執筆を始め、活動の幅を広げていった。地方詩誌への執筆に関しては、三二年六月、『海盤車』(横浜)発表の「風」が最初期のもので、三三年夏以降、『女人詩』(高岡)・『呼鈴』(浜松)などへ本格化すると稿者は考えていた。『関西文藝』はさらにさかのぼり、現在確認できる初めての地方雑誌であり、詩業発表の場所が多角化していくさきがけという位置付けができよう。

この後、阪神間の投稿誌にちかの作品が散見するようになる。『闘鶏』(プロムナード)、三四年二月、神戸)、『海盤車』(落魄)、三四年一二月、このときは神戸、以後も三篇寄稿)、『ファッシュョン』(随筆「春・色・散歩」、三五年二月、芹屋)などである。関西文壇との繋がりは、崇拜者藤村青一との縁がきっかけとなつたと想像するのも面白い。今後関西の雑誌から、知られざる左川ちかの作品が発見される可能性がある。

『関西文藝』は関西大学総合図書館所蔵。今回の資料閲覧・掲載にあたって多大なる協力を得た。改めて感謝申し上げます。

【参考文献】

加藤仁「藤村青一 知られざるモダニズム詩人」(『初版本』四号、人魚書房、二〇〇八年一二月)。

浦西和彦・増田周子・荒井真里亜『大阪文藝雑誌総覧』(和泉書院、二〇一三年、『関西文藝』の目次が記載)。

小野夕靄編、曾根博義協力『左川ちか全詩集』(森開社、二〇一〇年)

内堀弘『ボン書店の幻 モダニズム出版社の光と影』(白地社、一九九二年/ちくま文庫、二〇〇八年)

『螺旋の器』2号(森開社、二〇一八年一月)